

# 猫とネズミと魔法少女

ふあつと

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一匹の旅する猫とそれを取り巻く仲間たちの冒険譚。

笑いあり涙あり・・・多分ありのハチャメチャストーリー・・・の予定。

言うならば、

“ 此れは、一匹の愉快な猫と仲間たちとの珍妙な物語である ”

暁様にも投稿中。

# 目次

設定	
キャラ設定	1
魔剣設定	3
魔術・法術設定	5
第01章　く喪失の都の地下迷宮く	
第01話 「熱砂」の地獄	7
第02話 動き続ける「過去」	38
第03話 「機械龍」	80



# 設定

## キヤラ設定

・主人公組み

名前 : ビトレア・アドニス

種族 : 猫(非亜人)

性別 : オス

職種 : 冒険者

魔剣 : ガデヴァリウス

二つ名 : 無し

姿も言葉使いも全てが猫だが、どこか猫ではない生物(ナマモノ)。二足歩行して人語を話すことが出来る。

冒険者であり、Aランクと高ランクを持っているように、実力は高い方である。最近、自分が使っていた剣が魔剣だったと知り、次の目標は魔剣の力を使えるようにするのと。

名前 : ミキロール・D・ミリイ

種族 : 人間

性別 : 女性

職種 : 遺跡探求者

魔剣 : ヴァイエルアゴン

二つ名 : 舞姫ガトリングの連射銃レディ

遺跡を求めて西へ東へと旅する女魔術士。魔術士でありながら剣の腕も高い。ランクはSSランクに近いSランクであり、次にはランク昇進もしているだろうと言われている。

幽霊が苦手という可愛らしい部分もあるが、魔物ならば問題はない模様。そこらへんの線引きは彼女の親友でも分からないらしい。

## 魔劍設定

・魔劍「ガデヴァリウス」

持ち主 : アドニス

属性 : ???

種類 : 大劍

能力1 : ???

能力2 : ???

アドニスを持つ大劍型の魔劍。詳細不明。

・魔劍「ヴァリエルアゴン」

持ち主 : ミリイ

属性 : 炎・闇

種類 : 長劍

能力1 : 刀身を黒炎で包む

能力2 : ???

???	能力 2	能力 1	属性	持ち主	・魔劍「ヴァイトニルガルド」
	:	:	:	:	
	???	???	???	???	

本。  
 ミリイが持つ長剣型の魔劍。魔劍の中で最も古いと言われている“七大魔劍”の1  
 龍の片翼を模した形をしていて、刀身は黒く鈍い。まだ謎が多く残っている剣でもあ  
 る。



# 魔術・法術設定

## 〔魔術〕

### 《フレイム》

炎系下級攻撃魔術

詠唱：炎よ！弾丸となれ！

説明：魔力で包まれた炎。速さを調節できる弾丸。

### 《フレイム・ウォール》

炎系下級防衛魔術

詠唱：不明

詠唱〔略式詠唱〕焔の壁よ！迫る爪牙から護る壁と

為せ！

説明：地面からせり上がる壁のような炎。

### 《グラビトン・ボム》

闇系中級攻撃魔術

詠唱：闇より深く、深淵より在れ。全てを押し潰す、

虚無の力よ。ここに産まれ

詠唱〔略式詠唱〕闇より深く在りし虚無の力。ここ

に産まれよ

がり、周囲を飲み込む。

説明：重力の塊を発生させる。接触の瞬間に膨れ上

【法術】

【符術】

《光符》

光系下級補助符術

詠唱：光符、発動

説明：発動させると一定範囲を照らしだす光を生み

出す。

【特殊】

第01章　　〈喪失の都の地下迷宮〉

第01話　「熱砂」の地獄

その名は消され

意味は失われ

それでも、ただ在り続ける

魔劍——そう呼ばれる武器がある。

今よりも昔においてこの世界が“旧時代”と呼ばれていた時代に製作された——であろうと推測されるが、詳しいところは未だ不明の武器たちだ。今の時代の技術では製作不可能と言わしめ、並の武器では歯が立たない強力な武器である。製作方法はもちろん、その目的も全てが不明なのである。

そして、この武器を魔劍たらしめるのはその丈夫さでも貴重さでもなく、その身に宿す悪魔の力である。町一つを簡単に消し飛ばせるものから、何を目的として作ったのが謎の力まで幅広くある。これらは魔劍の“能力”と呼ばれ、魔劍の価値が半分はこれで決まると言っても過言では無い。

また、総称で魔劍と呼ばれるが、剣だけの形では無い。弓、槍、斧など様々な形を持つ上、大きさもバラバラである。人間サイズが基本だが、たまに人間が扱う目的では無いような巨大なものもあれば、極小のものまである。

初めて魔劍という存在が世に出てからある程度の時間が経った今、様々な用途で世界中の人間が探している。戦争の続く国では軍事目的で。とある宗教団体は平和を世に導くというこで。ある収集家はそのデザインから自らの欲を満たすために……。

故に、魔劍を持つ者は様々な敵に狙われる危険が出てくる。が、それを差し引いたとしても魔劍が持つ力は魅力的かつ絶大であった。

今では世界中で魔劍を求める者は少なく無い。険しき山頂や暗く深い海底などからも見つかることがあるが、その多くは遺跡から見つかることが多い。

“旧時代”の遺産——人々を魅了する浪漫と危険が溢れる古代の匂い漂う場所。何が目的で造られたのか、また何を材料に作られたのか、何故多くの魔劍が遺跡から見つかるのか、その関係性も含めて一切が謎となっている。

そしていつしか「遺跡探求者」なるものが生まれ、一つの職として広まるとギルドがこれを統括・管理・支援するようになった。

遺跡はまだ未発見のも多くあるという。今日もまた、どこかで誰かがまだ見ぬ遺跡を求めて旅しているのだろう。

—とある砂漠—

「にゃー……あつついにゃ」

地図片手にぎくぎくと砂地を歩くのは一人の旅人——いや、旅猫「アドニス」。羽織るマントの下には人の体ではなく、茶猫の体。フードの下には立派な猫耳。人と人外のハーフである亜人にも見えないが、それにしても猫すぎる者だった。

「どつかでそろそろ休む必要があるにゃ」

背中に背負う大剣も相俟ってか、歩く速度は遅かった。

アドニスは現在、東に位置する「リモートア国」内を西に向かって歩いていた。その先にある「紅蓮砂漠」と呼ばれる、国の半分程度を占める砂漠地帯である。事前に近くの村に寄り、携帯用の食事と水を買ってきてはいるが……それもどこまで持つことか。

「やっぱ、止めておけば良かったかにゃ」

金に困り、ギルドマスターに収入の良い仕事はないかと尋ねたところ、今回の仕事を請け負ったのである。

アドニスが請け負ったのは、西の紅蓮砂漠地帯にあると言われる遺跡の調査である。本来ならば遺跡探求者が赴くはずなのだが、大きなとは言えない国のギルドである。人がいないのだ。

そこに現れたのがアドニスである。冒険者——つまるところ「何でも屋」なので、こういった仕事も請け負うこともある。しかし、気になるのが今回の発端である。

今回の遺跡調査は、考古学者が意識を失う寸前に見つけたという情報だけで砂漠の中に遺跡が「確実」に在るといふ訳ではないのだ。最悪、砂漠地帯をうろろ歩いて干乾びて死亡なんてのもある。

「……………笑えない冗談にゃ」

そしてもう一つの疑問点。

それは考古学者——

考古学者が怪しい訳では無い。歴史に詳しくはないが、アドニスがこれから赴く紅蓮砂漠に調べる何かがあるとは思えないのだ。

歴史的価値もなく、ただ砂が拡がるだけの砂漠。魔物たちですら寄り付かない死の砂漠——そこに赴いた考古学者。

紅蓮砂漠を何の知識も無い学者が一人で歩けるはずが無い。冒険者か遺跡探求者に護衛を任せて調査に行く、これが通例だ。しかし、今回の依頼者である考古学者はたった一人で赴き、帰つて来たという。これらの点は町のギルドマスターも気にはなっていないが、彼らにそれを詮索することは出来ない。暗殺までを請け負う仕事場だ。これくらい怪しさ、珍しくは無い。

今のアドニスとしては、ギルドマスターの口車と空腹で思考回路の一部がショートしていたため、怪しいと知りつつもその仕事を即請け負ってしまったことだ。一度請け負った以上は、完遂しなければ名に傷がついてしまう。そこまで高いプライドがある訳ではないが、今後の仕事にも関わってくるので出来れば完遂したい。

そんなアドニスの意識を遮るように、カードが懐から落ちた。

「おっと、カードをなくしちゃマズいにゃ」

ギルドカード。そう呼ばれる彼らにとつては身分証明書にもなりうる大事なカードである。冒険者も遺跡探求者もこのカードで仕事を請け負うことができる。

カードには氏名や所属ギルドが書かれる。ギルドは世界中に点在し、一つの組織として繋がっているが、三つの大陸でチームとして分かれている。その他にも本人かどうかをチェックする照合部分やギルドマスターのみ確認できる細かな記録などがある。また、カードは強さを表すランクによって色が違いFからSSSまで九色である。また、一定レベルの者は二つ名という氏名とはまた違う名前が与えられる。

そして、仕事の完遂率も追記される。失敗し続ければ完遂率は下がっていく。が、仕事によっては難題というものもある。その場合は、ギルドマスターが請負人の強さや他の者がチャレンジした場合の成功率などから考えて、完遂率を下げない場合もある。

「さて、まずはあのおっちゃんの話から割り出した場所近辺でも探しますかにゃ」



砂漠地帯では目印などほぼ皆無。迷わぬようにコンパスと地図を調べながら、アドニス  
は足取り重く進んだ。

― 深緑の村「レオノラヴィレッジ」 ―

山や森などの自然に囲まれた緑の色濃い小さな村。外界と切り離されたような生活  
のためか、他の町などでは当たり前の物が無かったりするが……。

「うーん……これは、『短剣』？ それとも……『縄』？ でも、縄だと文章がおかし

くなるし……」

その町の宿屋の一角で、唸る少女がいた。長い黒髪に澄んだ黒瞳。あどけなさ残る少女——「ミリイ」は、前に潜った遺跡から出てきた古文書の解読に勤んでいた。片手に解読に使っている専門の辞書が付かず離れず握られている。

金属加工版（プレート）の形ならば解読も楽になるが、紙媒体の本などの書物となると劣化が激しく、また刻まれた文字も型崩れな物が多く、解読が困難となる。困難だからといって投げ出す訳にもいかなく、こうして頭を掻き毟るのである。

「ああああああ!! もう! これ書いた奴化けて出てきなさいよ!!」

書かれた文字は「日本語」に分類される古代語である。「日本語」は古代語の中でも一番解読が難しいとされる文字であり、それがまたミリイを悩ませることとなっていた。

「そもそも【日本語】は種類が多すぎるのよね……よくこれで古代人は生活出来たわよね。混乱しなかったのかしら?」

少ない数だと二十。多くても四十弱の種類の文字があり、それらを組みあわせて数多の単語を作り、それに意味を載せて文章を作る。

だが、「日本語」では「平仮名」「片仮名」「漢字」と三つのタイプがあり、「平仮名」「片仮名」はそれぞれ約八十の種類。「漢字」に至っては数えるのも億劫な程ある。

更に「漢字」では一文字自体が意味を持っていたりもするから、更にややっこしい。

例えば、「ふみ」という単語は今でいう「学問」と読む。と同時に、「手紙」とも読む場合がある。「私」「僕」は、一文字だけで共に「自分を指す」という意味がある。

文章の解説には、これが単語なのか文字なのか——また単語の場合は、どの意味で使われるのかを見極めなければならぬ。一つでも間違えれば何を言ってるのかさっぱり分からない文章が出来てしまうからだ。

「つれづれってなによ! つれづれって!! 連れて歩くの!?!」

「ふふ、なんだか困ってるみたいね」

気付けば、宿の女将がミリイの傍に立っていた。お盆の上には香り立つコーヒーが置かれていた。

「あ、女将さん」

「何度もノックしたんだけど、全然気付いてくれないからね。勝手に入ってきちやったわ。はい」

コーヒーをミリイの目の前に置く。恥ずかしさからか、ミリイは静かに受け取ると無言で飲み始める。

「部屋に籠っていると空気が悪くなるわよ? 気分転換に外でも散歩してきたらどうかしら?」

「うー……………分かりました」

女將の言うことは正論であり、昨日からずっと部屋に籠って解説に集中していたのだ。ここらで気分転換に近くを歩くのもいいだろう、と身支度を整える。濃茶のマントに旅に不向きと思われる軽装。そして腰には一本の剣を携えて。

幸いにも周りは自然が溢れている。というか、自然しか無いのだから。

散歩にと外に出たはいいが、いつもの習慣からかギルドが気になってしまい、自分で自分に苦笑しながらも足をギルドへと向けた。

「特にこれといったものはないかしら………あら？ 遺跡の調査？」

「ああ、それかい？ 確証は得られてないけど、見たって人がいるんだよ」

最後の方におまけで追加されたような依頼書を見つけた。どうやら近辺の遺跡調査のようである。

「最近のもの………よね」

「そうだよ」

「じゃ、これをお願い」

ミリイはギルドマスターに依頼書を持っていくと、登録を済ませようとする。それに慌てたのがギルドマスターである。

「これでいいのかい？ さつきも行ったけど、確証はないよ？ それに一人が先に向かつてるし……………」

「先に…？ それって遺跡探求者？」

「いや、冒険者」

遺跡探求者と冒険者。共にギルドに組する旅人だが、両者は違う存在である。前者は世界に眠る遺跡の発見・発掘・調査などを主な目的として、後者は何でも屋。悪く言えば、金儲けの為に動いているのだ。

ギルドは最初こそ遺跡探求者だけを支援していたが、最近は両者を分け隔てなく支援している。

「だとするとマズいわね…………。仮に本当に遺跡があつたら、せつかくの遺産が全部取られてしまうわ」

最近になって在るかもしれない、と言われるようになったということは、その遺跡は今まで誰にも発見されてこなかったということ。中にはまだ歴史的価値がある財宝が…………もしかすれば、魔剣などの貴重なお宝も残ってるかもしれない。

「早急に行くわ。手続きをお願い」

「ああ、お嬢ちゃんは遺跡探求者なのか…………分かったよ」

ギルドマスターにカードを提示、ミリイはこれからの予定を地図を見ながら考える。

遺跡は砂漠の中にあるという。

「ええと、ミ……ミリイちゃんね。おお、すごいね。二つ名持ちなんだ」

黒髪の少女「ミリイ」——二つ名「舞姫ガトリング・レディの連射銃」は本人確認を済ますと、ギルドマスターの言葉を右から左に流して、今後の予定を組み立てていった。

「さて、まずは食料調達かしら。地図では砂漠のど真ん中のようなだし……」

ならばまずは携帯用の乾燥食料。それに水だ。今のような軽装では少々心許ないので、ブーツや服なども少し調達したい。が、今ミリイがいるのはレオノラビレッジ。何でも揃っている大きな町では無いのだ。

「………あるものでなんとかしましょう」

ミリイはそう呟くと、先に行ったという冒険者のことを考えながら颯爽と消えた。

## — 紅蓮砂漠 —

ところかわり、一方のアドニス。時刻は既に夜を刻み、熱の地獄だった砂漠は一気に冷えた。

「だから砂漠は嫌いにゃー！」

あれからうろろと砂漠を歩いてきたが、遺跡の「い」の字も見当たらなかった。途中からは一々地図とコンパスと睨めっこするのが面倒になり、己の勘を信じて突き進むという愚行を冒した。もはや、帰り道など分かるはずが無い。

砂漠の上を寝転がり、頭上の満点の星空を見る。障害物が無い砂漠の空は綺麗で、他で見るよりも星が輝いて見えた。

ただ寒い。

「——ツ」

人間よりも多くの音を拾える耳が、異音を聞き取った。アドニスはすぐに起き上がり

大剣を構える。

ここは村や町では無く、砂漠。魔物すら近寄らない場所だが、それは一部を除く。

「さてはて……紅蓮砂漠には魔物は少ないと聞いたがにや……こういつたのは面倒な奴が多いから、出来ればお引取りをお願いしたいがにや……」

周囲の気配を探れば、既に囲まれているのが分かる。

いつ来るか、そのタイミングを計ろうとお互いに沈黙を守るが、先に痺れを切らしたのはアドニスであった。

「ッ!？」

大剣を背中に戻すと、その場から走り出した。

足が遅い魔物なら逃げ切れる自信はあるが、自分よりも早い魔物だったら場所を変えて返り討ちにしたところ。足場が砂だとしても動きにくいのだ。とはいえ、砂漠地帯で足下が砂で無いところなど、中々見つかるものではない。

走り出したアドニス。すると、足下の砂が起き上がりだした。その後ろでも砂が起き上がり、人の上半身の形を取り出した。

「サンドゴーレム! にやら、おいらでも逃げ切れるにやね!」

砂漠地帯に住むと言われる砂のゴーレム。人間でいう心臓に値する核があり、そこを破壊しない限り、ほぼ不死身という厄介な魔物である。



また、その他の特性に――

「にゃ!？」

集団で行動するというのがある。逃げ出そうとしたアドニスだったが、目の前で次々と同じように隆起する砂――サンドゴレム。砂場で走り難いというのもあつただろうが、どうやら包囲網を抜けるには色々足りなかつたようである。

数は八――倒そうと思えば、倒せなくもない数だ。見えるのが全て、だとしたら。

「やれやれ、にゃ」

砂漠でのサンドゴレム。ほぼ確実に核を突く攻撃をしないことには、助かる道はない。周りには彼らの元となる砂が大量にあるのだから。

「んじゃま。ちよつくらおいらの実力でも發揮するかにゃ」

逃げる事が出来ないと分かつたら、下手に逃げ道を探すよりも敵を駆逐してしまつた方がよい。アドニスは大剣を再び構え直すと、目の前のサンドゴレムに向き直つた。

そして、大きく深呼吸した後、一息で距離を失くす。足場が悪い以上「走る」ことは難しい。

ならば、「跳べ」ば良い。

砂地を蹴り上げ、超低空で跳ぶ。その速さを並の人間よりも圧倒的に速く、動きが鈍

いサンドゴーレムには対処できない速さであった。

アドニスは自分の背丈の倍以上はあるサンドゴーレムに正面から飛び掛かると、一気に一直線に大剣を振り下ろす。核というのは体のどこかに必ずあるが、それがどこにあるか”は固定されていない。つまり、攻撃して敵の体を削っていき、場所を特定しないとならない。

アドニスはまず真つ二つにして、勘を頼りにどちらかを集中的に攻撃して削る。サンドゴーレムの動き、再生速度は遅いと言うが、とろとろしていたら最初からやり直さないとならない。

「こうゆう場合は、魔術師や法術師が便利に思えるにや！」

剣などの物理攻撃だと斬って斬ってと地味に削っていかないとならない。が、魔術と呼ばれる力だと一々二発程度放つだけで済む。それだけ攻撃範囲が広く、効果的という。更に言えば、弱点の水系で攻めればあつという間だろう。ただ………水気無いこの砂漠地帯で水系魔術が使えるのか。また使えたとしても効力はどの程度に落ちるのか、が気になるところではあるが。

残念ながらアドニスには魔術の知識も無いため、使うことが出来ない。

「みつけたにや！」

ようやく一体目のサンドゴーレムの核を見つけた。自分の勘も中々当てになる――

—と思った瞬間にバックステップでその場を離れた。他のサンドゴーレムが襲ってきたのだ。

「マズッ！ 移動させないにゃ！」

切り崩したサンドゴーレムの体に砂が吸い上げられ、体を再生しようとしている。そうなる前に、核を突かないとまた最初からである。

「ぬおりゃあああああつ!!」

アドニスはその場で一回転すると、大剣を剥き出しの核へと放り投げた。それを防ぐうと他のサンドゴーレムが前に立つが、砂で出来ているサンドゴーレムには勢いを付けた大剣を止めることが出来ず、見事核に突き刺さった。

これで、ようやく一体を倒したことになる。

「あ……………」

が、敵は一体では無い。

「しまったにゃああああつ！ つい勢いで放り投げたけど、武器が無いにゃ!!」

慌てて地面に突き刺さっている大剣の下へと走る。元サンドゴーレムだった砂山を飛び越え——られなかった。

再生途中のサンドゴーレムが腕だけを伸ばして、アドニスを捕まえたのだ。

「このっ！ ちゃんと体を再生してから動きなさいにゃ！ てか、核を壊したんだから

死んどけにや!」

捕まえたとはいえ、所詮砂。命一杯暴れてやれば体は崩れて自由になった。

「ゴオオオオオオオ………」

だが、その一瞬が命取りだった。

サンドゴーレムたちは集まり、アドニスに折り重なるようにその身を乗せてきた。

「おぶっ! ペっペっ!! って何にや!? おいらを生き埋めにぶあつ!!」

一体、二体、三体と次々に折り重なっていくサンドゴーレム。アドニスは降り積もる砂に負けじと這い上がろうとするが、多すぎる砂に埋もれてしまった。

誰もいなくなった砂漠地帯——一際不自然な砂山があつたが、それもいつしか風に運ばれて普通の砂漠地帯と見分けが付かなくなった。

旅の途中、誰にも知られずにこの世を去る者は………多い。

「……………にや?」

ふと、起き上がる。

近くには自分の大剣が半分以上砂に埋まっているのが見える。他の荷物に関しても同じだろうが、見渡す限りは無い。

「おや? おいらは……………生きてるのかにや?」

見上げた空は砂に覆われて暗い。しかし、真っ暗闇という訳では無い。どこからは知らないが、明かりが漏れている。

「待つにや。今は夜にや………なんで、こんな明るいにや?」

これが昼間なら太陽の光がどこからか漏れてアドニスがいる地下まで光を運んでいのだろう、と考えられる。しかし、今は夜。月の光が砂に覆われた地下にまで届くとは思えない。

「というか………そもそもここはどこなのかにや? 砂漠の地下?」

周囲から生えている巨木。天井は草木と砂で覆われている。その微妙な隙間からは時折砂が毀れてきているのが分かる。まさか、砂の下にあるのが地面ではなくて巨木とは………誰が思いつこうか。

「どっからか上に戻る場所があればいいんだがにや………」

と、驚いている場合では無い。砂漠の地下に閉じ込められて一生を過ごすなど御免被る。漏れる光も気になると言えば気になるが………。

とりあえず、アドニスは歩くことにした。このまま止まって周りを見渡しているだけでは情報が集まらないからだ。更に言えば、いつ頭上から砂が落ちてくるか分からない状況で、さっさと安全な場所に移動したかった、というのもある。

それからしばらく。

歩けど歩けど景色は変わらず。ざくざくと砂地を歩き続ける。魔物が出てくる気配はしないが、一応警戒はしている。

時折、頭上から砂の塊が落ちてくるので、それらを躲らす。せつかく砂を払い終わったのだ。また埋まりたくは無い。

「にしても、あっちこちから明かりが漏れてくるにや」

漏れてくる明かりが一箇所ならばそこ目指して歩くのだが、あちこちから光が漏れ、おまけに周囲が昼間並み……とまではいれないが、夜闇の月よりも明るいのだ。どこを指して歩いたらいいのかがまったく分からない。

コンパス開いて適当に目指して歩こうかと思っただが、開いてみたコンパスは壊れて指針がぐるぐると円を描いていた。落下の衝撃か、それともこここの場所に変な磁場があるのか。とりあえず、

「コンパスは役に立たないってことにやね」

仕方ないので、毎度お馴染みの自分の勘を頼りに歩いている。人は何も目印なく歩いたら、ぐるぐると円を描いてしまうと言う。広大とはいえ、周囲には巨木があるのだ。さすがに同じ場所に戻ってくるなどは……………

「……………」

アドニス目の前には不自然に出来た跡がある。まるで誰かが倒れていたかのよう

な跡が。

「はて……………どこかで見たような形にや」

手があり足があり、頭には猫耳のような跡。大きさもちょうどアドニスと同じである。

「……………まじっ?」

大真面目なことだが、戻ってきてしまったようだ。

『じ……………ッ!!』

「にゃ!?!」

突如として鳴り響く音。人の声のようにも聞こえるが、人ではない声。そして、辺りが突如として赤い光に覆われた。

敵なのか、と背中から大剣を抜き、周囲を警戒するアドニス。

そして、すぐにも敵は現れた。ただ、アドニスが想像していた魔物では無く、

「いったい何者にゃ!?!」

謎の生物。いや、そもそも生物なのだろうか。

およそ、砂漠などの場所では見られないような敵だった。



赤い大きな目が一つ。足は無く、どうやっているのか謎だが宙を浮遊して接近してくる。速度は宙を浮いているためか、かなり速い。

アドニスという言葉など無視し、そいつらは襲い掛かってきた。

人のような形をした不釣り合いな手を伸ばし——アドニスはそれらを掻い潜り、大剣で飛び掛る。

——ガイーンツ

「かっつたっ!」

体が鋼で出来ているのか、アドニスの振るつた大剣は相手を斬ることなく弾かれてしまった。

こちらの驚きなどよそに襲い掛かってくる敵に、アドニスはすぐに距離を取る。足場は悪いがそこそこの広さはある。しかし、持ち味の速さを活かしきれない。

だが、アドニスとてただの冒険者ではない。

「さすがに『目』ならば!!」

直進——と思わせて、横に走り、壁を走って天井へと蹴り上がる。上下逆さまの状態で、弱点であろう赤い眼へ攻撃を繰り返す——悪寒がアドニスを襲う。

直感に従い、アドニスは攻撃を止めてすぐに離れる。瞬間、敵の大きな眼が輝くのが見えた。

「にゃあああああつ?!」

赤い眼からレーザーのようなモノが焼き払った。直撃を受けていれば、どうなっていたかは考えたく無い。

しかし、レーザーを避けたものの危険はまだ去っていない。

敵は一人ではないのだ。

ガシッ!

「にゃ、っ!」

彼らの伸びてきた手に捕まってしまった。異様に細い腕なのに力は強力で、抜け出せうにも抜け出せない。

『ビーツ』

『ビーツ』

これが彼らの言語なのだろうか。アドニスには理解不能な言葉で会話をする敵ら。何かを決定したのか、アドニスを捕まえた一体を残して残りの敵はどこかへと戻っていった。

そしてアドニスを捕まえた一体は他のモノとは別方向に飛んでいく。捕まえられた時に手放してしまった大剣をその場に残して。

「にゃ! ちよつと待つにゃ!! おいらの剣をおおおお!!」

当たり前だが、敵は待つてはくれず。アドニスの雄叫びをドツプラー効果で響かせつつ、敵はアドニスをどこかへと連れ去っていった。

—紅蓮砂漠—

先行するアドニスより遅れて一日。

ミリイは紅蓮砂漠にあると言われる遺跡に向けて少し急いでいた。装備は十分とは言えないが、最低限欲しい物が揃ったので良しとした。

「砂漠か………水系の魔術はちゃんと使えるかしらう？」

魔術というのは、世界に溢れるエネルギーである。〃自然エネルギー〃を使う。このエネルギーを取り込み、魔力に変換して、術式を通して魔術と為す。これが仕組みだ。つまり、魔術師というのは、〃自然エネルギー〃を魔力に変換する装置であると同時に、魔術にするための術式回路が備わった者のことを言う。変換装置は人が生まれた時から持っているものだが、魔術と成す術式回路は勉強して知識を深めていかないと作られない。

そして魔力。魔術師たちがよく口にする「魔力が足りない」ということだが、これには二つのエネルギーがある。

一つは、先に述べた、〃自然エネルギー〃。世界に一定量が常に溢れている——と言われているが、無くなったらすぐに補充される訳では無い。一箇所で魔術をバカスカ使えば、あつという間に、〃自然エネルギー〃は枯渇する。

もう一つは、〃生命エネルギー〃である。人間の心臓などの器官を動かす力のことである。この力を使って、変換装置を動かすと言われている。この〃生命エネルギー〃も無くなれば人は疲れを覚え、枯渇してしまえば器官を動かすことが出来ずに死んでしまうことになる。

これら二つのエネルギーが枯渇、あるいは十分な量が得られない場合、魔術師たちは

「魔力が足りない」と口を揃えて言う。

また、これらとは別に【精霊】も関係してくる。

“自然エネルギー”とは別に世界にいる【精霊】——自然の化身とも言われているが、“自然エネルギー”との違いや関係性は明らかになっていない。【精霊】たちには属性というのがあり、これが魔術にも大きく関わってくる。

“自然エネルギー”というのは純粋なエネルギーであり、属性で言うならば無。つまり、周囲のモノに左右されやすいのだ。周囲のモノ——“自然エネルギー”と同じで自然の力である【精霊】である。

例えば、砂漠地帯には多くの炎属性の精霊——【炎精】や土属性の精霊——【土精】がいて、逆に水属性の精霊——【水精】などはほとんどいない。この場合、砂漠地帯には多くの炎属性や土属性の“自然エネルギー”があるということになる。

そのため、砂漠地帯では炎系の魔術は通常よりも効果が上がり、反面水系は効果が下がる……最悪、使えないということだ。

——現状、特に影はなし。

遮ることの無い日光がミリイへと降り注ぐ。流れる汗を拭いながら、ミリイは地図で場所を確認しつつ進んでいく。

——場所は北西より、と。もう少し北に向かってみようかしら。

最悪なことは「遺跡が砂の下に潜った」ということだ。過去の技術を秘める遺跡である。そういつたことがあってもおかしく無い。過去に見つかつた遺跡の一つに、一定間隔で空を飛ぶという代物もあるのだ。地下に潜る遺跡があつてもおかしくは無い。

「その場合はここを掘ることになるのかしら……」

広大な砂漠を掘るとなると、困難なのは場所の特定である。また深さも関わってくる以上、それは困難というレベルではないのかもしれない。

その時だつた。

「——ッ」

殺気がミリイへと降り注ぐ。どうやら魔物のお出ましのようだ。

「珍しいわね。ここに魔物が出るなんて……大方、ゴレム系だと思うけど」

いつでも魔術を唱えられるように周囲を警戒しつつ、足を止める。

ミリイは剣を携えているが、本職は魔術師である。前衛か後衛かと言えば、後衛に分類されるタイプだ。が、それは一般的な場合である。

ミリイは魔術師でありながら剣士でもある。つまり、後衛のポジションでありながら、前衛も行えるという。磨きに磨かれた技術と類まれないセンスによつて、また才能にも恵まれ、魔術と剣を同時に操れるのだ。

しかし、彼女が剣を使う姿はあまり見られない。魔術の方が燃費が良いのと、使つた

後の疲労感が魔術の方が気持ちいいとのことだ。おまけに、魔術発動に必要な詠唱も低レベル魔術ならば省略出来るという才能まである。

「サンドゴーレムね！ 《炎よ！ 弾丸となれ！》」

隆起する砂に、現れたのは砂漠でお馴染みの魔物——サンドゴーレムと判断した。

ミリイは慌てることなく手を振りかざし、魔術を行使する。ミリイの手より放たれたのは炎系魔術の中でも初歩的な魔術——炎系下級魔術《フレイム》だ。

炎の弾丸《フレイム》は外れることなく、サンドゴーレムに当たると、その身を砕けさせた。直撃までには至らなかったのか、核となるものが無傷で見えた。

「そっね。もういつちよー」

今度は無詠唱で《フレイム》を放つ。簡単に行っているが、魔術に関して類稀なる才能を持つミリイだからこそその技である。

あつという間にサンドゴーレムが一体倒れ、ミリイは次の標的へと移った。

「……………」

だが、問題が出てきた。熱である。

熱地獄の砂漠で炎の魔術。否応なしに周囲の温度は上がっていく。ミリイは一体倒すごとに汗が溢れでてくる。おまけに爆風で舞い上がった砂が汗で体に引っ付いて気分は最悪である。

「最悪ね……一気に潰すか。《焔の壁よ！ 迫る爪牙から護る壁と為せ！》」  
熱さに参ったのか痺れを切らしたミリイ。少し下がり、サンドゴレムの包囲網から脱出する。と同時に詠唱を開始。すぐに反転して、地より隆起する炎の壁を出現させた。

「さすが砂漠地帯。望んでも無いのにバカでかくなつたわね」

先ほどミリイが放つた炎の壁《フレイム・ウォール》も、炎属性の「自然エネルギー」が溢れている砂漠地帯で放つたためにいつもよりも大きく力強く出現することになったのだ。

そしてそれはミリイを更に苦しめることとなる。

「……………」

それはやはり熱である。

大きく、力強くなればなるほど、周囲に及ぼす熱量は多くなるだろう。何度も言うようだが、ここは砂漠。体感温度でさえ半端なく不快指数を超えているというのに、その中で巨大な炎の壁。視覚的にもよろしくないと言える。

余談だが、聡明で魔力も枯渇することが無いのでは、と言われるほどに多く持ち、才能溢れる優秀な魔術師であるミリイだが、幼少の頃から猪突猛進で後先考えない大馬鹿者と近い者には言われていた。



ミリイの魔術の前に、サンドゴーレムたちはひとたまりも無かった。全員が軽く消し炭にされ、風に浚われていった。

それらを尻目にミリイは苦悶の表情で砂漠を歩いていた。

「ううー！」

戦闘による運動と、ありえない熱量による汗によつて軽い脱水症状に陥っているのだ。あれから水をすぐに体に取り入れたが、すぐに回復する程人の体は優秀ではない。

今すぐにも倒れたい衝動を我慢しつつ、ミリイは足を踏み出す。パーティメンバーがミリイ以外にもいたのなら、そのまま身を預けても良かったかもしれないが、残念ながら今は一人の身だ。砂漠のど真ん中で倒れる訳にはいかない。

気力を振り絞りながら歩き、ミリイはなんとか身を休めることが出来る岩場を見つけることが出来た。体を横に倒し、

「あ、もうダメ……………」

気を失うように眠りに入った。

ミリイにしてはあるまじき、魔物避けの結界を張ることを忘れて――

第02話 動き続ける「過去」

幾億の時を超え

今再び

“魔王”——今や御伽噺にしか語られることの無い魔物たちを統括していた存在。魔物たちの王。人類の敵。

“旧時代”に存在していたとされるが、どこで何をしていたかなどはあまり詳しく残っていない。どこで猛威を振るい、どこで被害を出したのか。また、誰に倒されたのかも……………。

勇者や英雄たる人物が人の世のために、自ら魔王討伐に出かけたや、魔王は別世界を支配しに行った、など多くの噂が流れているが……………真相は既に闇の中となっている。一つ言えるのは、今では姿を消したが過去には確実に存在していたということだ。

「……………忌々しい“神”め」

今宵は新月。夜闇の中、月明かりさえも無い場所。無骨な岩に腰掛け、彼は本を閉じた。ランプの明かりを消せば、周囲に明かりは無くなり完全な闇が姿を現す。人も植物も無く、魔物さえもない静かな空間——静かに風だけが通り過ぎる。

「いづれ、また出てくるだろう……………」

そう呟いた言葉には色々な感情が混ざっていた。怒り、哀しみ、憧憬に苦しみ……………。

彼はすぐにそれらを収めると、闇の中で身支度を整える。男にとって闇は常に周りにあるモノ。今更、闇の中で見えなくなることなどありはしなかった。

「それで、あなた一人で戦うつもり？」

その背に言葉が投げつけられるまで、彼は背後の存在に気付かなかった。即座に振り返り、武器を構え――

「……………お前か。何の用だ？」

「ふふ、よく分かったわね」

背後にいた存在がよく知った人物であったことに、構えた武器を下ろした。

「……………」

「ん、何よ、黙っちゃって。別にあいつの言う通りに進めることはないでしょ？」

「だが……………」

「ふふん、それにあの『場所』にいるのは何を隠そう私の子なのよ」

「子？ お前に？ ……………いや、そうか。なるほど」

月の光さえ届かぬ闇の中、両者は何かを話すと、背後の存在は現れた時のように消えた。

「……………時は廻り、再び戻ってきたか」

ばさりとマントを翻し、男もまた歩みを始める。そこには最初から何も無かったか

のように風が吹いている、だけだった。

「ん……………」

ミリイが気が付くと、周囲は既に夜になっていた。熱の地獄だった砂漠は温度を急激に下げ、深夜になれば氷点下までいくだろう。

体感温度からして、夜はまだそこまで更けてはいない。

「さむっ…というか……よく、あたし魔物に襲われなかったわね」

いつもある自分を囲う結界も無し。加えて、魔物が蔓延る場所で堂々と寝ていた。この事実が今ある奇跡をミリイに教える。

「さて、探索を再開しましょうか」

十分な厚着をし、ミリイは休んでいた岩場から歩きだす。普段ならば、夜の砂漠など歩きはしないのだが、昼間休んでいたおかげか体力が有り余っていた。

ズズツ

砂漠を歩いたことで気付かれたのか、独特の殺気がミリイへと降り注いだ。

「……………しつこいわね」

隆起する砂——サンドゴレムである。盛り上がる砂が人の上半身の姿を取る前に、ミリイは無詠唱で《フレイム》を放つ。

敵の数は十。

——さて、どうしようかしら？

単発の《フレイム》で順番に片付けていくか、それとも広範囲攻撃に切り替えて一網打尽とするか。

「いつきにいきましよー！」

今は数は十。しかし、ここは砂漠。いつどこでサンドゴーレムが増えて出てくるか分からない。更に言えば、砂漠は人が過ごすには少々酷なものがある。勢いに任せて依頼を受けてしまったが、ミリイはさつきと帰りたい一心だった。

「〔略式詠唱〕《闇より深く在りし虚無の力。ここに産まれよ》」

幸いにもサンドゴーレムたちの包囲網は小さかった。対象がミリイ一人ということも大きかったが、これが彼らにとつての誤算となった。

ミリイは砂地から少し浮くように跳び、そこから空気の間を蹴るように一息に上空まで跳び上がった。回転するように体を傾けて、詠唱を略して放つ。そうして生まれたのは一つの闇——《グラビトン・ボム》である。

ミリイの手から放れたソレはサンドゴーレムたちの中心に落ちると、瞬間的に膨れ上がり、サンドゴーレムたちを吸収した。強烈な重力が辺り一帯をとこと構わずに集めて押し潰していくのだ。

《グラビトン・ボム》はやがて役目を終えたのか、始めとは打って変わって、緩やかに収束し、消えた。

先ほどミリイが使ったのは詠唱を略して唱える方法だ。上位の術者が扱うことのできる高等技術である。

本来ならば護衛する者と魔術を唱える者がいるのが通例だが、魔術師一人で旅する場合は、全て一人で対処しなければならぬからだ。

また、何気ないように詠唱を唱えながら動き回るミリイだが、実はこれはかなりの異常なのである。魔術師というのは、詠唱中は基本的に動くことはおろか身の防衛すら出来ない。中には剣を振りながら詠唱を唱える実力者もいるが、それはかなりの少数である。更に、詠唱を略すという高等技術に加えて跳ね回るミリイのような者は皆無と言っても良いほどに少ない。

「つと。次が来ないうちに、さっさと移動しますか」

まるでクレーターのようになつた砂の上に、ミリイが着地する。

だが、

——ズルツ

「……………はい？」

着地。そして歩き出そうとした瞬間、ミリイの足が突然沈んだのだ。一気に膝上まで沈んだら、抜け出そうとする前にふとももまで更に沈んだ。もはや、足は完全に埋まった。



敵ではない。流砂である。何が原因かは分からないが、突如として流砂が生まれたのは確かである。

「ちよっ!?! つとー!」

周囲に何か掴む物があれば、仲間が誰かいれば、もう少しだけ時間があれば………だが、虚しくも時は非情。

周囲は砂ばかり、今のミリイは一人であり、冷静になるだけの時間も与えられずにミリイは砂の下へと消えていった。

「なめんじやないわよおー!」

が、そこは通常とは違う魔術師のミリイ。即座に自分の足下に《フレイム》を爆発させ、続いて自分の上空に先ほどの《グラビトン・ボム》を展開。

《フレイム》の爆発の威力で浮き上がり、上空の《グラビトン・ボム》の引力の力で流砂から逃れようというのだ。《フレイム》の爆発もそうだが、下手をすればサンドゴレムたちのように押し潰されてしまうので、タイミング良く術を消さなければならぬ。

詠唱途中の場合は詠唱破棄という形になるが、一度展開された術となるとその破棄は難しい。が、方法が無い訳ではない。

いくつかある中で、最も簡単で最も分かり易い方法を取った。

すなわち——

「ふつとびなさい!!」

更なる強力な術による破壊である。

自分で展開した術を自分で破壊する。このようなことを考える魔術師はそうそういないだろうし、実行する者はおろか考える者さえいない、はずだ。

「もういつちよー!」

《グラビトン・ボム》はこれで消せたとしても、ミリイは未だに流砂の真上。横に跳ぶためにも足場はなく、再び《フレイム》の爆発という力で飛んだ。

《療符、発動》

無事とは言いがたいが、流砂から逃れることができたミリイは、荷物から一枚の符を取り出すと自分の足に貼り付け、起動の言葉を紡ぐ。

これは「符」と呼ばれる代物で、魔力を持つ特殊な紙に魔術を組み込んだ物である。起動の言葉を紡ぐだけで発動することから、「簡易魔術」とも呼ばれることがある。

魔術よりもやや威力は落ちてしまうものの、自らの魔力を必要とせずに、更に紙であるため軽くて一度に多く持てることから冒険者や旅人には重宝されている。

「はあ………もうちよつと手加減すれば良かったかしらねえ」

一枚の療符を使ったが、傷は完治とはいかなかった。

ミリイの場合、破壊に使われる攻撃魔術ならば下級はもちろん、上級まで使える。しかし、傷の治療などに使われる補助魔術の一切が苦手なのだ。

過去に努力を重ねて重ねてきたが、才能が攻撃に特化しているのか、努力が実ることはなかった。

もう一枚、療符を取り出して発動。それでも完治はできなかったが、なんとか歩くには問題ないレベルまで癒すことは出来た。

「つつ……まあ自業自得よね。さて、確認しますか」

ミリイは立ち上がると、先ほどの流砂の一步手前まで歩く。先ほどの流砂は自然のものではないと確信していた。自然の流砂ならば、落ちる速度は緩やかに、そして暴れなければそこまで激しく沈むことは無い。

だが、先ほどの流砂では一気に沈み込み、暴れることもしないのに体はどんどん沈んでいった。そこから考えられることは一つ。

「やっぱりね……」

地下洞である。

恐らく、《グラビトン・ボム》の一撃で洞窟の天井に穴が空いたのだろう。そこに砂漠の砂が流れ落ちていった。幸いというのか、さほど高さは無い。上から落ちた砂が山となっているのが上から見える程だ。

「砂漠の地下の洞窟……遺跡に繋がっているといいわね」

ミリイは飛び降り、砂の山をクツションとして無事に下に降りた。

—紅蓮砂漠・地下洞—

「変な洞窟ね……」

辺りに砂が落ちてるのは問題ない。ただ、周囲を囲むような植物が問題である。陽の光射さぬ地下で植物がここまで育つのだろうか。

更に不思議なのは床や壁である。ボロボロで薄汚れてしまっているが、岩とも思えない……不思議な物だった。

周囲を気にしながら足を進めていくと、

「これは……」

道の横に捨てられたナニカがあった。

「よく分からないけど、この形……どう見ても“旧時代”の代物よね」

朽ち果てたボロボロの体に割れた赤い瞳。引き千切られた腕などの損傷具合から、壊れたのはかなり前であるのが分かる。

手、と思われる部分はある。しかし、足となる部分が見当たらなかった。壊れた際に失ったか、それか元々なかったか。

「……持ち帰りたいわね」

壊れているとはいえ、ここまで形が残った“旧時代”の物は無い。持ち帰って、然るところに提出すれば恩賞も出るかもしれない。その前に自分で調べても良い。

しかし、持ち帰るには帰る道も分からないし、少女のミリイでは運ぶには少々重すぎる物であった。

「むう」

悔しいことであるが、補助系の一切が苦手なミリイでは魔術でなんとかという訳にはいかない。出来るだけ壊すことせずに運ぶとなれば、ミリイでは腕力のみで運ぶしかない。攻撃魔術でバウンドさせながら運ぶなどすれば、数回で粉微塵である。

今は諦めるしかなかった。

「……………あああああああ」

その時だった。

異音が響き渡った。

「なんの音かしら?」

「……………あああああああああああああああ!!」

それは音——というよりは、声。人の声——のようなものであった。

「にやあああああああああああああつ!!? だああうれかあああああああ!!」

奥から現れたのは、今日の前で朽ち果てている“旧時代”の代物と同じ形をした物だった。赤い眼があり、横から突き出した長い腕。そして足は無く、宙を浮遊していた。

そして何故か捕まっている猫……………と思われる何か。

「あれ? ん?」

猫に見えるが、言葉を発していた以上、亜人の類だろうか。と思索する暇もなく、敵はミリイをみつけ、敵と判断したようである。

「——つ、今はそれどころじゃないわね!」

得意の炎系の魔術を出しそうになって、思い留まる。今いる場所は地下なのだ。空気は通っているようだが、油断は出来ない。もしかしたら、どこかに穴が——先ほどのように大きな穴が空いている可能性もあるが、基本的に地下の空気は有限なのだ。



「《収束する意識、纏いて瓦解せよ！》」

ミリイの空いた手から紫電が生まれ、矢の形を成して敵へと飛ぶ。『旧時代』の代物は、総じて雷系に弱いというのが今の常識である。中には雷に対して強い物もあるが。今まで見てきた『旧時代』の代物とは違う物……だが、明らかにデザインからして『旧時代』に生まれた代物であることがミリイには分かっていた。

——とりあえず、これで様子見ね。つて、あ。

まずは、下級の魔術で様子見。これで倒れるならばそれで問題無し。もし、これで倒れないようならば、更に上で……と考へに至ったところで、気付いた。

いまだに猫(?)が敵に張り付いていることに。

「ちよ——」

雷系の魔術に総じて言えるのは、攻撃速度の速さである。ミリイが何かを言う前に、彼女の手を離れた紫電——《シヨック・ブレイク》は、敵へと見事に到達していた。

「ぶにやにやにやにやにやにやにやにやにやにやにやにやにやつ!!!」

奇怪な悲鳴と共に焼き焦げる猫一匹——そして、同じく焼き焦げて地面に落下する謎の敵。

「ま、まあ………さすがに死んでは………いない、わよね?」

この世の全ての生物は、魔術などに対する抵抗値——【魔術抵抗】を持っている。こ



れは、自分に向けられた攻撃魔術などに対して威力を減少させる力だ。

これにより下級程度の力ならば、ぶつかつたとしても早々死ぬことは無い。が、油断していれば、たやすく命を奪うモノでもある。

先ほどの場合、ミリイに剣で殴られ、背中に不意打ちに近い形での魔術の一撃である。

「……………」

「ぶはっ!? なんにや!? ここはだれで!? わたしはどこにや!」

「あ、生きてた……………」

こちらの懸念など何とのはや。猫(?)は無事に生きていた。

「……………んお? 何か記憶が曖昧にや……………」

どうやら先ほどのことは忘れているようだ。ここぞとばかりにミリイは近付き、現状を説明した。

猫——アドニス、旧時代の兵器と思われる敵に捕まっていたところを、地上から降りてきたミリイが偶然見つけて助けた、ということ。

アドニスの疑問はもっぱら「敵の攻撃」として片付けてしまい、何とか事無きを得た。

「にしてもねえ……………」

「なににや? まだ疑ってるのかにや?」

このアドニス——自らを猫というのだ。猫の亜人ではなく、猫である、と。

この世のどこに二足歩行して歩く猫がいるのだろうか。ましては人語を解する猫などありえ——

「目の前にいるにや」

「あたしの常識を返しなさいよ……………」

崩されていく常識に何とか足を踏ん張り、眩暈を気合で吹き飛ばしたのがつい先ほどのこと。

「にや? どつからどうみても猫にや」

「どつからどうみても猫じゃないわ」

「にや! 見るにや! この耳! 髭! そして尻尾を!! これを見て猫じゃないとは

これいかに!」

「だまらっしやい! どこの世界に猫が二足歩行で人語をしゃべるのよ! あんた、猫の亜人でしょ? じゃなかったら化け猫よ!」

「だから、おまいの目の前にいるにや!」

「あーもう! 何なのよ、この不可思議生命体は!」

猫の亜人ならばまだ納得できる領域だ。他の亜人に失礼になるが。

兎にも角にも、目の前のアドニスと名乗る猫（仮）が、猫であることにミリイは憤りを感じた。

「まあいいわ……………猫（仮）で納得するわ」

「なんだか失礼な奴にや……………ところで、ここはどこにや？」

「あたしも分からないわよ」

二人はとりあえず、お互いの経緯を話した。何故ここにいいのか、どうゆう目的があったのか、など。こんなところにいるのだ。お互いに普通の旅人ではないことは理解していた。



「じゃあ、あんたが先行してた冒険者って訳なのね」

「まあそうなるにや。そうゆうおまいは遺跡探求者とはにやね……………よくまあ、ここに来たもんにや」

「まあ、ね」

遺跡探求者と大きく分類されているが、中に入れば更に分かれている。情報を収集す

る者、遺跡の中に入り調査する者、発掘された物を研究する者。

この遺跡の場合、未だ確証は持たれていないため、まずは情報を収集するチームが動き、確証性を得てから遺跡の中に入るチームが動く。ミリイは遺跡の中へと入るチームに分類されるため、本来ならまだここにはいないはずだ。

しかし、必ずこれを守る、ということはない。必要に応じては情報収集チームが中に入ることもあれば、研究チームが情報を収集に走ることもある。

「で、先に入ったそつちからして、ここはどういったところなの?」

「ん、よく分からんところじゃ」

アドニスとして入ろうとして入った訳では無く、気付いたら地下に落ちていたのだ。そして、あつという間に謎の敵に襲われて今へと至る。先に入ったからといっても、そこまでの違いはないのだ。ミリイが望むような情報は無かった。

「謎の敵って、さっきの? そういれば、あれらは何処から来たか分かる?」

「ま、おおよそだけどもや。おいらの荷物も持ってかれてなければそこにあるはずじゃ」

「じゃ、案内して」

「おkじゃ」

謎の敵に捕まった際に落としてしまった大剣。それを取り戻すのがアドニスの目的である。遺跡探求者が来た以上、冒険者のアドニスはいてもいなくても良いと言えば良

い。

カードに傷が付いてしまうが、まあ然したる問題ではない。元より、アドニスはいったことを気にしないタイプなのだから。

「ここまで来たら何とやら。付き合いなさいよ」

「面倒にや」

「——なら、あんたの案内が終了したと同時に撃ち殺すしかないようね」

「こわっ!? しかも何故殺すにや!?!」

黒い笑みを浮かべるミリイに結局折れるしか道が残されていないアドニスであった。

歩き続けることしばし。一向に終わりは見えてこない。だが、壁や床が明らかに変化してきたのは分かった。いつの間にもやら遺跡内に入っていたのだろう。

そのおかげか、洞窟内を照らす光源がどこからか漏れて、歩く二人を照らしていた。

「……………微妙な暗さね。あんた、光符持っていないの?」

光符とは、光系の魔術を封じ込めた符のことであり、一定時間周囲を照らすことの出来る光源を作る。こういった洞窟内の探索にはよく使用される。

「さつきも言ったにや。荷物は全部、向こうに落としてきたにや」

「使えない猫ね……………」

「第一、おいらの目ならこれくらいの闇、問題ないにや」

変なところで猫なアドニスだった。

「こんなことならもつと買ってくれば良かったわ」

炎系の魔術の中でも下級に位置する《フレイム》。その気になれば、ミリイは撃つことせず、手の上に展開し続けるという無茶なことも可能である。後を考えなければ、だが。

先ほども襲ってきた「旧時代」の敵相手に戦うには雷系の魔術が有効だ。剣などの武器でも戦えないことはないが、場所が場所なだけに長期戦は避けたいのである。肝心なところで、魔力が足りませんでした、では笑えない。

「にや?」

「どうしたのよ?」

「何か……………音が聞こえないかにや?」

「音?」

耳を澄ます。しばらく息さえ潜めて音を探る。が、ミリーの耳には何も届かない。

「何も聞こえ——」

「聞こえたかにや？」

「ええ、ナニカの足音が——あんた、耳良いのね」

未発見の遺跡で、更に依頼が出されたのが数日前……だが、迷い込んだ旅人がいないとは限らない。

敵か味方が分からないが、ナニカが近づいてきているのは確か。二人はお互いに剣を抜き——

「すまんにや。おいら、武器が何も無いにや」

「ほんつとに！ 使えない猫ね！」

かといってミリーがアドニスに剣を貸すことは出来なかった。ミリーの持つ剣がただの剣ならば、それも可能だったが——これはただの剣ではないのである。

「あんた、武器無しでも戦える？」

「可能にや。猫の力を見せてやるにやよ」

「……出来れば止めて欲しかったわね。これから他の猫が見れそうにないわ」

ミリーは前方を。アドニスは後方を。狭い空洞内を響いて聞こえてくるため、どこから接近しているのかが分からない二人。恐らく前方だろうが、宙を浮遊する敵もここに

はいるのだ。互いに背を合わせていつでも飛びかけられるようにと警戒する。  
そして、ナニカが現れた。

『ガガツ、シン——シャ、——ジヨ』

「横っ!?!」

二人の横の壁を突き破り、ナニカが現れた。おかげで、ミリイとアドニスとは二つに分断されてしまった。

「あれは!?!」  
「機械兵士」!?!」

「何にや!?!」 それ!?!」

「旧時代」において戦争の道具としてポピュラーだった殺戮機械——「機械兵士」。  
人などの生物とは違い、壊れても修理すれば何度でも復帰し、また情なども無いため、完膚なきまでに殺戮を遂行出来る。

戦争の前半では人の手による修復が行われていたが、後半になるにつれて人の数は少なくなっていく。そのため、「機械兵士」自身に自己修復機能を付け、己の意思で修復するようにさせたのだ。壊れた「機械兵士」やその他のモノから奪い取ることで——  
「機械兵士」よ!?! 本物よね!?! それが動いているなんて——!?!」



「ちよつ！ ミリイ!?」

だとすれば、アドニスたちがいるこの遺跡は「旧時代」で武器庫やそれに近い何かでは無かったのだろうか。もしくは、何かの重要な場所——

「いいわ！ いいわ!!」面白くなってきたわ!!」

「んなこと言ってる場合かにや！ 数が多いにや!!」

アドニスの言う通り、現れた「機械兵士」はミリイ側からに二。中央に三。アドニス側からは三体やってきた。合わせて数は八。やってやれない数では無いが、「機械兵士」自体がどれくらいの戦闘力を持っているかが分からない。

「なら、試し撃ちね！ 《炎よ！弾丸となれ!》」

さつそく、ミリイが《フレイム》を「機械兵士」に向けて撃つ。牽制の一撃だ。これでどれくらいのダメージを受けるか——

『炎——シー、ド』

しかし、ミリイの《フレイム》は「機械兵士」に当たる前に、シールドのようなものに防がれてしまった。

魔術でも法術でも無い。一瞬だけ顕現した力によって完全にかき消されてしまったのだ。

「はっ?」

呆然とする二人。無情にも、【機械兵士<sup>ソルジャー</sup>】たちはその間も接近してきている。

「なんにやー!! やるならもつとビシツとやるにや!!」

「うるっさい! 役立たずの猫は黙ってなさい!」

——今の力はいったい何? 魔術では無いようだし…………。

魔術師である以上、魔力の流れには敏感だ。だが、今の力には魔力の流れが感じられなかった。法術かもしれないが、どうも法術でも無いようである。

そもそも、魔術にも法術にも“生命エネルギー<sup>オド</sup>”が必要である。完全機械の【機械兵士<sup>ソルジャー</sup>】にそれらがあるかと言われると、否…………だが、仮にも“旧時代”の遺産。完全には調べ尽くされていない。

——それにさっきの。防がれたというより、無力化された感じね。

「アドニス! ここは逃げるわよ!」

「逃げるにも前も後ろも真ん中も塞がれてるにや!」

【機械兵士<sup>ソルジャー</sup>】たちに武器らしい武器はなく、ボロボロとなった四肢があるだけだ。しかし、鈍重に見えるその腕が勢い良く振り下ろされれば、人間など簡単に潰されるだろう。「あたしの方が数が少ないわ! ここを切り抜けるわよ!」

「了解にや!」

ミリイ側——二人の進行方向からやってきた数は二体。アドニスは持ち前の俊敏

さを活かし、【機械兵士】の脇を掻い潜ってミリーの横に並ぶ。

「【機械兵士】は動きが遅いわ。その分、一撃が重いから受け止めるのは得策ではないわ」  
「それは見た目で分かるにや」

「あたしが動きを止める。あんたはその際に攻撃よ——〔略式詠唱〕《焔の壁よ！迫る爪牙から護る壁と為せ！》」

「あちちっ！ わかつたにや！」

後ろの【機械兵士】たちに《フレイム・ウォール》をお見舞いする。しかし、やはりというかシールドが顕現するとたちまち姿を消してしまった。

「狙うなら、心臓。首。無理なら足よ。動きを止めるだけでも問題ないわ」

「おkにや」

「しくじるんじゃないわよ！——〔復元詠唱〕《フレイム・ウォール》」

略式詠唱と共に高等技術に数えられる技術——前に使った魔術の詠唱を完全省略して行う方法だ。

再度、ミリーの後ろに炎の壁が出現する。それを確認する前にアドニスと飛び出した。

「さすが、猫なだけあって早いわね！——《ショック・ブレイク》」

アドニスよりも早い魔術ともなれば、もう雷系しかなかった。最も手早く唱えられる

もので下級に分類される術をミリイは即座に選択して放った。

『ガガ——、リ、ールド』

「うにやああああ、るおおおおっ!」

アドニスを超えて到達した《シヨック・ブレイク》は、【機械兵士<sup>ソルジャー</sup>】のシールドの前にも簡単に消えた。アドニスはそのシールドを破壊するつもりで爪を立てたのだから、シールドには触れることが出来ずにその場で一回転して転がり落ちてしまった。

「——っ！ アドニス！」

「にやつ！」

踏み潰される刹那、アドニスは横に転がり事無きを得た。

「もう一度、《シヨック・ブレイク》」

生まれた紫電——数瞬後には【機械兵士<sup>ソルジャー</sup>】はシールドを展開していた。

——どこかで魔力を感知しているのかしらね？

分かったことは、あのシールドには属性に関係なく魔術の一切が効かないこと。まだ下級と中級のレベルしか試していないので、全てとは言いが……：……上級でも効果はさほど無いだらう。

次に、物理的には触れられない。つまり、あのシールドは魔術しか防がないということだ。

「はあああああつ!!」

ミリイは腰から剣を引き抜くと、構えながら走り出した。その際、片手で符を取り出して、先に【機械兵士】へと投げ飛ばした。

『マテ——、——ド』

——かかった!

シールドを展開した【機械兵士】に真っ直ぐと突き進む。突き出した剣は何の障害も受けることなく、【機械兵士】へと吸い込まれた。

「ほら! シールド張ってなさい!」

剣を突き刺した【機械兵士】を横へ突き飛ばし、空いた手でもう一枚の符を隣の【機械兵士】へと投げつける。先の一件で分かったことだが、【機械兵士】は魔力に反応してシールドを張るようである。つまり、魔力を帯びた紙である「符」を投げつけられれば、勝手にシールドして止まってくれるのだ。

「アドニス!」

「おうにゃ!」

鈍重な【機械兵士】である。攻撃範囲から離れてしまえば、逃げ切るのは簡単だ。

『——ガガッ、——ニユウ——警——2』

「はあ！ はあ！ はあ！」

アドニスとミリイは全力で走った。洞窟内を右へ左へ上へ下へ。当然ながら、帰り道などもう分かりはしない。

「はあ、ここがどんなところか………おおいに興味が沸くわね」

「頑張つてにや。おいらは、さっさと剣を見つけたらとんずらを——」

黒い笑みを浮かべてアドニスのどたまを握り締めるミリイ。そのまま自分と同じ視

線の高さまで持ち上げた。

「——ふふふ、アドニスつたら冗談がうまいのね」

「はい、誠心誠意手伝わせてもらいますにや！」

最早、上下関係は明らかだった。

「そういや、ミリイはあいつのこと良く知ってたみたいにやね？」

「知ってたって程じゃないわよ？ 文献とかで見ただけだもの。実物みたのは今日が初めてよ」

「おいら、歴史にはあんま詳しくにやいけど…… “旧世界” だっけかにや？」

「“旧時代” よ…… まあ、 “旧世界” でもあながち間違いではないけど」

“旧時代” に関する文献はかなり少ない。原因として考えられるのが、“旧時代” の最後に行われた大戦——【神々の黄昏】と呼ばれる最終戦争である。ここまで損傷の激しい情報は、最終戦争で燃え尽きてしまったためではないか、と。

見つかる文献からは単語は見つかっても、その意味を残している物は少ない。

例えば“戦車” と呼ばれる兵器。兵器であることは分かっているが、どういった形でどうゆうものかは不明である。同時に“自動車”、これは兵器かすら分からない。同じ“車” が付く以上、似たような兵器ではないかと言われているが、真相は分かっている

い。

「で、【機械兵士】<sup>ソルジャー</sup> っていうのはその最終戦争で使われたポピュラーな兵器の一つよ」

「ふうん。おいら、歴史には詳しくないからにや〜」

【機械兵士】<sup>ソルジャー</sup> に関しては、戦争後半に多く活躍していたためか、比較的多く文献には残っていた。製造方法こそ不明だが、その強力は伝えられている。

曰く、一騎当千の力を持つ。

曰く、死を怖れぬ不死身の兵士。

曰く、破壊の権化。

「一騎当千ね……そんな強い奴だったかにや？」

「長い間ほつとかれたみたいだからね……動きも鈍かったし、その所為じゃないかしら？」

「そんなもんかにな」

話しているうちに大広間へと二人は到達した。頭上からは時折砂漠の砂が落ちてきて、ところどころに砂山を築きあげている。

さして広くはないが、砂が辺りを覆い隠してしまっているのでここを探すとすると困難である。

「で、あんたが落ちてきたのってどこらへん？ さつさと武器を回収しましょ」



「探してはいるんだがにや……埋もれたのかにや？」

「まじ？ こゝを掘るのは勘弁よ」

ざくざくと砂を踏みながら、アドニスと歩く。その後ろを付いていくようにミリイが歩く。右や左と視線を動かすが、剣など見つからない。

しかも下だけに気を取られると、頭上から落ちてくる砂に気付けない。たえず、頭上も気にしながら部屋の中を搜索していた。

「どうする？ こゝからへん一帯吹き飛ばしてみ——？」

「にや？ ミリイ……おまいの剣、何か光つてるにや」

アドニスの指摘通り、ミリイの剣が淡く光を発していた。

「な、何かしら？ 魔剣が反応してる？」

「魔剣？ おまいの、魔剣なのかにや？」

そうよ——とミリイが腰から魔剣を引き抜く。垂直に持ち、柄を軽く握る。と、不可思議な力に引つ張られるようにミリイの魔剣が傾いた。

アドニスも何か言いたげだったが、手がかりが無い以上、ミリイの魔剣の力に任せようとした。

「————にやね」

そして、ある地点で魔剣が引つ張る力を下に変えた。つまり、この下に何かがあるの

だろう。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」

「できればおいらの剣が出て欲しいところじゃね」

「じゃ、後はよろしく」

「……………まあ分かってたことにや。魔術でぶっ飛ばされなかったただけマシかにや？」

ミリイは魔剣を再び鞘に仕舞い、少し離れた位置からアドニスを見守る。アドニスは両手の爪を立て、勢い良く砂山を掘り始めた。まるで土竜である。

周囲を気にせず掘るため、砂塵が辺りを覆いつくす。

「———つたく。あのバカ猫は」

防塵マントを顔まで深く覆うように被り、更に離れた位置に居座る。

「あつたにゃー！」

しばらくして、アドニスの声が響いた。どうやら目的の武器が見つかったようである。砂塵の中から飛び出してきたアドニスが持っていたのは一本の大剣。ミリイの持つ漆黒の長剣とどこことなく似ている灰色の大剣。こちらは長剣と比べて、一切の装飾が無く、機能性を重視されたと見られる。

「それがあんたの剣？」

「そうにゃ」

「ふうん……………」

微弱ながらアドニススの剣から魔力が溢れ流れているのを感じたミリイ。軽い気持ちで触れようとしたが――

「――っ！」

すぐに手を引つ込めた。

アドニススの剣もまた、魔剣であつたのだ。

魔剣を扱うには、魔剣に認められないとならない。おいそれと使うことは出来ないのだ。認められる方法も魔剣によって多種多様である。

そして、認められた使用者以外が魔剣に触ると、魔剣はその者を喰らい尽くすという――いわゆる、拒絶反応を起こす。

もし、あの剣に直接触れていたらどうなっていたことか……………。

「……………でも、何であたしの魔剣が反応したのかしら？」

魔剣が他の魔剣に反応するなど聞いたことが無いし、これまでもミリイは幾つかの魔剣と合つてきた。そのどれもで、今のようにならなかつた。

「どうしたにや？」

「その剣――魔剣よ」

「にや？　この剣がかにや？」

「そうよ——つて、今まで気付いてなかったの？」

「これっぽっちも」

「……………なんであんたみたいなのが魔剣持ってるのかしらね」

鈍感なだけで魔剣からの拒絶反応に気付いていない、とも考えたが……………その場合、アドニスはまだこの世に現存している以上それは無いだろう。

ということとは、少なくとも魔剣に認められているということだ。

「じゃあ、能力も何も？」

「分からないにやね〜」

「……………」

「ミリイ様。無言で睨みつけられるのはすっごく怖いにや」

ミリイの魔剣に反応したことや色々と気になる点はあるものの、まずはここからの脱出が先である。

「じゃ、行くかにや」

「他の荷物はいいの？」

「にや〜、出来れば掘り出したいが……………さすがにここを掘るのは気が滅入るにや」

アドニスが一番に欲しがっていたのは、この大剣——魔剣である。出来れば、他の荷物——食料や金などを掘り出したい。掘り出したいが、どれだけ掘れば出てくるの

だろうか。また、どこを掘ればいいのか。

魔剣がここにあつたからといって、近くにあるとは限らないのだ。

そう考えると、掘る気も失せてくる。

「ま、あんたが良いならいいけどね。で、あたしは少し先に行きたいけど……道分かる？」

「分かると思うかによ？」

「でしようね」

なので、二人は適当に歩くことにした。入り口も出口も分からない中、奥に進んでいるのか外に進んでいるのか分からないが、立ち止まっただけでは外に出られないからだ。

「そーいや、ミリイ」

「なに？」

「この明かりつて何だか分かるかによ？」

「これだけじゃ分からないけど、多分『旧時代』の遺跡の中だから……『電灯』じゃないかしらね？」

「でん……どう？」

「そうね……『旧時代』の松明つてところかしら？」

「なるほどによ」

「旧時代」では当たり前前で、今では失われた技術。それらを再び世に出そうと、日夜研究者たちは努力をしているが……その夢が叶うのはいつになることやら。

この「電灯」もまたその一つである。文献によれば、日夜常に光を放ち、周囲を照らしていたと言われている。

「でも、これが仮に「電灯」だとしたら、「電力」が流れてるってことよね……」

「また新しい単語にや……」

「あんたね……一応、冒険者なら、これくらい知っておきなさいよ」

「歴史は苦手分野にや」

魔術を行使するのに魔力が必要なように、電灯を動かすには電力と呼ばれる力が必要不可欠だった。

今漏れてる明かりが電灯の明かりだったと仮定するならば、この遺跡にはまだ電力が作られ流れ続けていることになる。

「これは……もう、大発見よね？ ふふ、ふふふ……うふふふふ!!」

「おお、ミリイが黒い……黒いにや」

アドニスミリイから立ち上る黒いオーラに引いている時、風を切る音が二人の耳に届いた。

「——っ！」

アドニスと横に、ミリイは後ろに跳び退く。その数瞬後に二人がいた場所には何か突き刺さっていた。

「にや！　またあの飛ぶ奴にや！」

「いっぱいきたわね……」

「旧時代」の浮遊する敵兵器だ。

「ここは開けた場所だから、向こうまで逃げるわよ！」

ちようど目の前に狭い洞窟が口を開いている。

「あいあいにやー！」

侵入者を捕まえて排出するように動いていたということは、機械兵士ソルジャーとは違って攻撃能力はないのかと思っていた。が、

「アレ、目からレーザー出してくるにやよ」

「十分、攻撃能力はあるってことね」

アレには雷系が効くのは先刻の件で承知している。狭い空間内に誘き寄せれば、十分に対処は可能だろう。

「1、2、3で反転して、応戦するわよ！」

「どっちが数持つにや!？」

まず迫ってきたのは三、その後ろに二、四と続いている。

「あたしが先に真ん中を潰すわ！」

「あいにや！」

「1！」

「2！」

で、足を前に突き出してブレーキ。そして、

「3!!」

反転。

すかさずアドニスが飛び出す。

「《収束する意識、纏いて瓦解せよ》」

真ん中の敵に向けてまずは先制。雷の一撃が敵を貫いた。

「まずは一体！」

「にやらあああああああああ！」

——ガイーンツ！



「いいいいっ!？」

アドニスの剣が弾かれる。どうやら、相当以上に硬いようだ。

「にやあああ! そういえば、前るときも弾かれてたにやああ!」

「バカ猫! そうゆうのは先に言いなさい!」

遅れて突撃したミリイはその光景を見てから、攻撃目標を胴体から赤い目に変更した。

——ビキッ

弾かれはしなかったが、貫きもしなかった。輝は入ったがそれだけだ。だが、それは別に後続の敵が迫ってきていた。

「アドニス!」

「うにやああああつ!!」

二体の敵をそのままアドニスに任せ、ミリイはすり抜けて次の列の敵に向かう。

「《遍く業火! 敵を屠る飛礫と化せ!》」

ミリイが前に突き出した手に、拳大の炎の塊が生まれる。そして、詠唱の終了と共に炎の塊から連射銃のように炎の弾丸が発射される。

炎系下級魔術《フレア・ガトリング》——ミリイが一对多の戦闘で好んで使う魔術である。

しかし――

「くっ！」

最前列の二体は防御が間に合わなかったのか、ミリイの魔術は届いた。が、それより奥にいた敵には届かなかった。【機械兵士<sup>ソルジャー</sup>】が防いでみせた謎の力で無効化してみせたのだ。

「あの無効化するフィールドを展開するには時間がかかるようね」

「ミリイ！」

「つとー！」

アドニスの声にミリイはその場にしゃがむ。頭上を無骨な腕が通り過ぎた。

「あんたはもう黙ってなさい！」

詠唱を省略してシヨック・ブレイクを放つ。これで、最初の三体、次の列の二体が片付いた。残りは四体。

「ふう、あと四体か……………」

「どうするにや？」

「全力で走れば拮抗してところかしら。どこまでも追ってくるタイプだったら厄介ね」

「逃げるかにや？」

「そうしましょうか！」

瞬時に反転して、ダツシユで駆ける。レーザー攻撃もなく、二人は追跡者が諦めるまで駆けた。

第03話 「機械龍」

希望

絶ち切りしモノ

「はあ、はあ、はあ」

「やっと、諦めた、ようにや」

中々しつこく追つてきてたが、右に左にと走つて逃げてたら追うのを諦めたようである。

「……………ふう、もつとちゃんとした装備を揃えてくるんだつたわ」

「おいらはヤツラが金をドロップしてくれたら良いんだけどにや」

魔剣一本だけになったアドニスがしみじみと呟く。例え、「旧時代」の遺物だと言つてアレラの破片を持つていったところで、買い取つてはくれないだろう。ある程度の形は残してしかるべき場所に行かなければ金にはならない。

「普通の魔物もここだと出るかどうかは怪しいわねえ」

となると結果として、例え敵が何かドロップしたとしてもそれが金に変換できるかは分からない。

「にやあ、ミリイ」

「なに？」

「さっきの奴はどういった奴か分かるかにや？」

「見たとこない形だからねえ、一旦村に帰つて資料を見ないと分からないわねえ」

それでもタイプとしては情報収集をメインとした隠密兵器だろう。魔術を無効化するシルルドの展開が遅いのも一つ。攻撃用の武器が少ないのだ。戦闘特化という訳ではないの是一目瞭然。

「にやんのため？」

「さあ？」

結論を出すにはまだ情報が足りなさ過ぎる。

「とりあえず、奥に行ってみましようか」

「だにや。また襲われてもしょうがないしにや」

ぐねぐねと曲がって走ったため、また確認などもしてないため、今日の前にある道が奥へと繋がってるのか、それともまだ見ぬ出口に繋がってるのかが分からない。

「奥ってどつちにや？」

「……………」

もちろん、ミリイにも分からない。

「じゃ、ここはおいらの秘密能力を見せる時かにや」

すちやつとアドニスが魔剣を取り出す。とすと地面に立てる。ぱつと手を離すと、魔剣が倒れた。

「……………」

「……………」

壁の方に。

「つまり、奥はこつちにや！」

「じゃあ、壁を壊しなさいよ」

「ふう、同じ背景ばつかで前に進んでるのか後ろに進んでるのかわからないわね」  
「だにや」

道は真つ直ぐ。横に曲がる時は90度、かくんと曲がる。綺麗に整頓されているのだ。

「また十字路だわ」

「一応、マッピングしてるけどにや、途中からだからあまりあてにならないにや」

「えっと、右に進むと戻る可能性もあるのね」

「直進か、左か。おいらは左」

「じゃ、あたしは直進ね」

ミリイが出したのは一つのコイン。コイントスをして、当てた方の道に進むという感嘆な賭け事だ。

「いくわよ——はい！」

コインを上弾き、それを分からないようにすぐに手で隠して腕に押し付ける。さしものアドニスも見えなかったようで、唸りをあげて迷っている。

「むむむ……………表にや！」

「じゃあ、あたしは裏ね」

ゆつくりと腕から手をどける。そこに置かれたコインは——表だった。

「つしや！ じゃあ、こつちにや」

「むう……………まあ仕方ないわね」

大喜びするアドニスに渋顔のミリイが後に続いた。



—  
???

アドニスたちの言う敵——MDF搭載型情報収集機、通称“MF—J”は、音を消し、周囲から姿を消すステルス装置を起動しながら飛行していた。目指す場所は遺跡の奥——中枢システムの置かれている場所。

彼らの目的はアドニスたちが言うように情報を集めるのが仕事。集めた情報を中枢システムに送り、それを彼が判断して整理し、他の機械兵器たちに指令を送る。

『敵——認』

『情——検——』

壊れたスピーカーから漏れる音は人には少々物足りなく、理解出来ない言葉。しか

し、それは人に伝えるために作られた装置であり、人がいなくなった今——必要無いとも言える部分だった。

MF—Jは中枢システムと自身を繋ぐと、情報の共有化を計る。

『……………』

中枢システムのパネル画面に映し出される映像。様々な場面のアドニスやミリイたちの戦闘映像が早送りで流される。

彼はそれを静かに眺めながら、溢れる情報を整理していく。

『戒——ル——3』

そして、彼からの命令が下った。

『————了解』

長き眠りについていた者たちが、起き始めた。

「道はまだまだ続いてるにや」

「そうね」

アドニスの指す方角に進むことしばし、だがこれより先の道に明かりは無く——奥は闇だけである。

「光符はあるかにや？」

「まだあるにはあるけど………帰りのことも考えると、少し遠慮したいわね」

ここまでに使った光符。そしてまだ見えない終わりへと続く先のことを考えると、ここでの使用は避けたいところである。

が、

「どうするにや？」

「どうしましょうか」

道があつたら先に進む。それはアドニスもミリイも同じ考えだ。しかし………とミリイは悩む。

「《光符、発動》」

結局、進むことにした。

「アドニス。まだ数はあるけど、出来るだけ消費は抑えたいから少し急ぐわよ」  
「あいあいなのにゃ」

こういつた遺跡には侵入者を防ぐための罠が仕掛けられている場合がある。それに気を付けながら慎重に進みたいところだが、光符の消費を考えると全力ダッシュをしたところだ。

とりあえず、周囲に注意しながら急いで行くという、何とも中途半端なことをする羽目になったが仕方が無い。

「にしても、遺跡ってのはみんなこんな感じなのかにゃ？」

「ん？ あんたって遺跡に入ったことないの？」

「基本、そっちの仕事にゃ。おいらはここが初めての遺跡探索にゃ」

遺跡探求者も冒険者も出来ることは同じである。主にやることで違ってくるだけであり、仕事の差別などはされていない。今のアドニスのように遺跡に潜ることもあれば、ミリイも冒険者の真似事をして誰も咎めない。

「まあ、全部が全部って訳ではないけどね……基本はこんな感じよ」

二人が歩いているのは鉄とも木とも思えない不可思議な素材で作られた通路。大抵の遺跡はこの素材で作られている。幾つモノ素材を複雑に混ぜ絡ませて作られている

——とまで解明出来たはいいが、素材の復元には未だ至っていない。

「そもそも、遺跡つて何で作られたのかにや？」

「諸説は色々あるわよ。魔王を打ち倒すための場所だったとか。人間たちの主要都市の一部だったとか。何かを行うための儀式の場所だったとか、ね」

遺跡からは多くの遺産が今までに見つかってきている。武器——魔剣が見つかることもある。生活用品——“旧時代”の人たちが暮らしに必要としていた道具が見つかることもある。比較的見つかるのが魔剣を始めたとした戦争のための兵器や武器であることから、戦争に使われた基地のようなモノではないかと言われている。

“旧時代”では国が百を超えて存在していたという。今は数えても三十あるかないかである。今の時代でさえ、人と人、国と国の争いが絶えない。それが百以上もあるとすれば、国同士の争いでさえ絶えることはなかったのではなからうか。そこで登場したのが基地——今で言うところの遺跡である。

というのが、未だ論争の激しい遺跡についての解答である。

「ま、どつちにしろ。まだ何も分かってないってことにやね」

「そもそも、情報が少ないからね。これから先も分かるかどうか……ま、あたしは遺跡に潜れるだけでも十分楽しいからどうでもいいけどね」

歴史に興味が無いと言えば嘘になる。“旧時代” “魔剣” “遺跡”、気になる単語は

かりである。

そして何より気になるのが、今の時代の歴史である。今の時代、歴史は三百年前からしか存在していないのだ。それより以前の記録がどの文献にも載っていない。

更に「旧時代」の歴史が終わったとされるのが、今より四百年前ではないかと言われている。それを仮とするならば、その間の百年には何があったのか。

遺跡探求者のもう一つの目的——それが失われた百年の謎を追うことである。

「どうしたにゃ?」

「ん? ちよつと考え事……あら?」

「んー? 落書きかにゃ?」

「古代語ね」

光符で照らし出された壁、その下の方に文字のような物が刻まれていた。「旧時代」と今では文字も変わっていて、大まかに古代語と現代語という風に区別されている。

「この独特の形……やっぱり【日本語】ね」

「分かるのかにゃ?」

「さすがに無理ね。これはちよつと形が崩れすぎてるわ。解読用の辞書と睨みながら時間をかけないと。それに、ほとんど擦れて見えないわ」

興味深いと呟くとミリイはノートを取り出して、壁に書かれた古代語を見える部分だ

け書き写し始めた。こうゆうところに目が行くか行かないかが、冒険者と遺跡探求者の違いなのかもしれない。

「でも、なんでこんな壁にあつたのかにや?」

「さあ………とりあえず、奥に行つてみましょう」

普通ならば、情報記録装置や本などの媒体にあるものだ。それが壁の下——それも書き殴つたかのように乱雑にあつたのは不思議すぎる。

とはいえ、ここで考えていても答えは出てこない。二人は、更に奥へと進むことにした。

そうして進んでいくと、しばらく一本道だつた通路の横に幾つもの部屋が現れる。廃墟となつて時間がかかり経つたのだろう。荒れに荒れていた。

最初は何か無いものかと物色していたアドニスたちだが、それも五つを超えるとすると素通りするようになってきた。

部屋の広さこそ小さいものだが、乱雑に荒れているため物色に時間がかかつてしまうため。またこれまでに物色した部屋にはこれといった物が無かつたためだ。

「お宝でも見つければテンションが上がってくるんだがにや〜」

「確かに………。ここまで何も出てこないとなると、気力が持たないわね」

未踏の遺跡である。もしかしたらアドニスみたいに偶然辿り着いた者がいるかもしれないが、その可能性は低いだろう。この遺跡は噂にもなっていないのだから——  
「ん？　そういうえば、あんた……ここに来た目的って考古学者からの依頼だったわよね？」

「そうにや」

「ここって地上にも現れるのかしら？」

全貌が見えてこないため、まだ結論を付けるには早すぎる。が、ミリイは地上と地下とを繰り返し移動するような遺跡には見えなかった。

「にや？　例の考古学者のことかにや？」

「ええ。よくよく考えてみると、おかしいわ」

考古学者は倒れる寸前に見たという。ならば、その時は地上に出ていたのだろうか。それよりも、その考古学者事態が明らかになっていないのがおかしい。

「あたしは急いでたから碌に確認してないけど……」

「おいらもにや。考古学者については秘匿扱いにや」

これが暗殺依頼などの裏の仕事ならまだ分かるが、考古学者が自分を秘匿にするなど有り得るのだろうか。普通ならば、自分が一番最初に見つけたということの名を売るために必ず出す。調査に出かける遺跡探求者などは基本的に二番目であるから。



「なんだか怪しくなってきたわね……………」

怪しいことは怪しいが、分からない部分が多すぎるため一度保留とした。全てが終われば明らかになるだろう、と信じて。

不安を胸に進んでいくと、再び道が別れていた。

「うにゃ?」

「あら?」

右と左。再びのT字路である。

ふつとアドニスとミリイの視線が交わり、その一瞬後に、

「こつちにゃ」

「こつちね」

それぞれ別の道を指差して、また睨みあった。

「……………」

「……………」

「ねえ、アドニス。さつきはあんたに従ったんだから、今度はあたしに従いなさい」

「分かってないにゃ。おいらに従ったからこそ、こうして奥まで来ることが出来たにゃ。

「こもおいらの意見を尊重するのが普通ではないのかにゃ?」

「……………」

「……………」

「じゃあ、やっぱりこれになるのね」

「だにや」

そういつてミリイが取り出したのは一枚のコイン。再びのコイントスである。

『——コッチ——』

「——っ!？」

上へと弾いたコイン——受け取られることなく、静かに地面へと落ちた。アドニスとミリイの両者は共にナニカが聞こえた通路の奥へと視線を固定している。

「……………アドニス」

「うにや。おいらにも聞こえたにや」

「……………いくわよ」

「おうにや」

二人は警戒を更に強めながら、選ばれた道を進むことにした。アドニスは剣を。ミリイはいつでも魔術が放てるようにと片手は常に空を握っていた。

「罨だと思っ?」

「うにやく……なんとも言えんにゃ」

相手の目的や狙い、出方などが少しでも分かれば判断できるだろうが、その一切が分からない謎の敵。判断するだけの情報がまだ出揃っていない。

「……………」

「……………」

少し進むと、こじんまりとした部屋の入り口が見えてきた。ミリイとアドニスは一度向き直り、頷く。

《光符、停止》

唯一の光源だった光符がその役目を一時止まり、周囲は暗闇が広がる。目が慣れるにはしばらく時間が必要だろうとミリイはその場に立ち止まる。その横を後ろから付いてきていたアドニスが追い抜く。猫であるため、夜目は利くのだ。

気配だけで進むアドニスに何も言わず、ただミリイは己の目が闇に慣れるのを待った。

先行するアドニス。まず、部屋に入る前に、先に続く通路を調べる。見える範囲での敵影・気配などは無し。しばらく待つてみるが、無音の世界が広がるだけである。続い

て、部屋の中を見て――

――誰もいない？

予想していた影は何も無かった。これまで見てきた部屋と同じように乱雑に荒れた部屋だけだった。魔物などの気配も無し。

拍子抜けしたアドニスは、やや警戒を緩めて部屋の中へと入る。罾などの類も無かった。

――おいらたちの気のせいだったのかにや？

音を立てて歩いてみせても、やはり出てくる影は無かった。アドニスだけならば幻聴とも判断できるが、ミリイも聞いたとなると幻聴では無いだろう。

「――アドニス？」

「うにや。何も無い……………みたいだにや」

「そう――《光符、発動》」

再び光源が現れ、周囲を照らしだす。せつかく闇に鳴れた目だが、再びの光に軽く眩む。照らし出され、改めて見てもおかしな場所は何も無い部屋だった。

「声――てか、何かの音が聞こえたわよね？」

「聞こえたつてことは早々遠いところでは無いはずにや。だから、ここかと思つたがにや……………」

残念ながらも、ここには音を発するようなモノは無い。ならば、何の音が聞こえたのか？死者の怨念だとしても言うのだろうか。

(うう、考えるのやめておこ)

「どうしたにや？」

「な、なんでもないわ……………」

ふと地面に視線を落とした際に気になる文字列がミリイの目に入った。すらすらと読むことの出来た単語、その意味——

ミリイは屈むと、静かにソレが書かれた紙を拾い上げた。

「『機械』…………『竜』……………【機械龍の研究】!？」

「古代語読んで一人納得しないで欲しいにや。おいらにも分かるようにお願いするにや」

ミリイの手元を覗こうにも、そこに書かれている文字は古代語。アドニスでは読めない文字なのである。

「あ、ああ……………さすがのあんたでも名前くらいは聞いたことあるでしょ？【機械龍】

の名前くらいは」

「ふひひ……………」

「ん？」

「ないにゃ」

がくつとミリイの頭が下に落ちた。

“旧時代”の世界には【竜】と呼ばれる種族の魔物がいる。この竜たちはその昔、魔王が異世界より召喚してきた異世界の魔物と言われている。その力は強く、賢く、到底人のレベルでは太刀打ちできない敵だった。

そこで、人が考えたのが模倣である。目には目を、歯には歯を。竜には竜である。そうして造りあげられたのが、竜を模した兵器——【機械龍】である。

しかし、人の技術力を持つてしても竜本来の力のコピーには至らなかった。所詮は二番煎じ。正面から戦えば勝ち目は無かった。だが、そこで諦める人間では無い。

一体で無理ならば二体で。機械龍だけで無理ならば人間も後方より援護して、戦った。どれほど個が優れていようと、数の暴力には敵わないものである。また、機械龍は他の生物とは違い、すぐに成長——もといパワーアップが望めた。そのため、最初は劣っていたにも関わらず、あつという間に竜を追い越す性能を身に付けたのだ。

だが、ここまで分かるほど後世の時代に伝わっているというのに、その機械龍自体が見つかるとは無かった。戦争で壊れたのか、違うのか。また、どのような形で、どのような性能を持ち、どれほどの力を発揮したのか。

全部ではないにしろ、製作過程や研究結果などは見つかつていないので、その存在は確かだと言われている。なのだが、肝心の本体が未だ見つからない。

「あの竜でさえ、七夜で世界を滅ぼすと言うのよ。それを超える力を持つ機械龍……まさか、こんなところで情報が得られるとはね」

ギルドは遺跡の管理なども行っている。危険と判断すれば封鎖し、必要あらば爆破して消去もする……がしかし、過去の遺産である遺跡。それを爆破するのは少々難しかったりする。

そして、遺跡の他にも魔剣や兵器などの管理も行っている。そのリストの中で上位に余裕で君臨するのが、先にも言った「機械龍」である。

「とにかく！ アドニス！ これと似たような文字が書かれていたら拾って集めて！」  
「お、おうにや！」

アドニスは文字は読めないが、文字の形を見て覚え、それが少しでも似てると思ったら集めておこうと考えた。幸いにも、散らばっている紙は多くはない。

「というか、これって『旧時代』の紙なのにあや？ よく今でも読めるにあやね」

「正確には紙じゃないらしいけどねー」

「違うのにあや？」

「『データプレート』って言って、長期間の保存用の板らしいわよ？ 今の時代の紙に

似てるから紙って読んでるだけで、実際はすごい技術の塊よ」

「にやるほど……もしかして、金になるかにや？」

「んー、結構見つかったから……そこまで期待しない方がいいと思うわよ」

比較的安易に見つかるために、「旧時代」の紙はそこまでの価値はなかったりする。が、そこに保存された情報はモノによつては紙以上の価値があったりする。

「まあいいにや。集めるとするかにや。これは、違うかにや？」

「こつちは……うーん、前衛的にや」

「ふむ、読めないにや」

ぶつくさ言いながらもガサガサと紙を拾っては集め、必要ないと思ったものは投げ捨てている。多くの紙を広い、脳裏でミリイが言つてた文字と照らしあわすうちに、どれが基準となる文字が分からなくなり、後半は適当に集めているだけだったが。

「おっ」

紙を取り除いていくと、何やら青く輝く宝石が見つかった。手にとつて見ると、宝石の中には輝く元となる液体のようなモノが入っていた。ただの宝石では無いことはさすがのアドニスでも分かり、そのまま持ち帰ることにした。

その時だった。

大きな音と共に、遺跡全体が震えるように鳴動し始めた。音という音が鳴り響き、止



まっていた周囲の時間が突然動き始めたようである。

「なに!? きやつ!!」

音が鳴り止んだと思えば、突然体全体を地面に押し付けられた二人。周囲には誰もいない。しかし、体は上に鉛を乗せられたかのように動かない。

「か、かにや……………」

「これ、は…………魔術? いえ、もしかして、遺跡が上がってるの!」

来るのが突然なら終わるのも突然。二人の体は少しして解放された。その反動で周囲が再び散らばるが、二人の知ったことでは無い。

「なんだかマズい空気が流れてないかにや?」

「マズいもマズいわね。何だか分からないけど、一度脱出しましょ」

無音だった世界に音が生まれたのだ。遺跡の機能が動き出した——即ち、侵入者を排除しようと動き出しているのだろう。

アドニスとミリイはそれぞれ集めた資料を仕舞うと、一目散に來た道を戻った。

「帰り道は分かっているのかにや!」

「分からないわ! けど、あたしの予想が当たってれば——!」

走る二人の前に割り込む影。

「にやにや!」

「この急いでる時に！」

見たことの無い兵器であった。だが、何をしようとしているのかは考えるまでも無い。邪魔だと言わんばかりに《フレイム》を放つ。

「くっ！ っ！ つらも!!」

この兵器たちも、魔術を無効化するシールドのようなモノを備えている敵だった。そして、そのシールドを展開している間は動きが遅くなることも実践で分かっていることだ。

「なら、《遍く業火！ 敵を葬る飛礫と化せ!》」

前方の兵器たちに向けて飛ぶ無数の炎弾。それを縫うように動く小さな影——アドニスである。

「おいらも忘れてもらっちゃ困るにや！」

兵器たちは《フレア・ガトリング》を感知するやすぐにシールドを展開した。その隙を狙うアドニスが、魔剣を強く握り、振るう。

「うにゃ!？」

「嘘っ!？」

動きが遅くなると思っていた兵器たちだが、シールドを展開しながらも動きは遅くならなかった。アドニスの魔剣に余裕で反応していた、

「別れ道にや!? どつちにや!」

「地上に出たなら空気の流れがあるはずよ! アドニス、分からない!」

「にや、にや、にや、こつちにや!」

「その言葉、信じるわよ!」

ミリイも魔剣を握り、進む道を邪魔する者だけを片付ける。無駄のようだが、一瞬でも反応を遅らせることが出来るならば、とミリイは魔術を連続で放つのを止めないでいる。また、アドニスも魔剣を振るい、倒すことは出来なくても弾き飛ばすことが出来れば良い、と力任せの一撃を続けた。

やがて二人は懐かしの砂漠へと戻ってきていた。

「巨木………は、無い!地上の砂漠だわ!」

「うをつ! でつかいにや!」

振り向いて自分たちが出てきた入り口を見る。その先には見上げるのも疲れそうなほどの遺跡が鎮座していた。見上げているだけでは分からないが、小さな村や町くらいならば収まりそうなほどの大きさがある。

『ルオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

入り口より奥、深淵より地底から響く声。外にいるアドニスたちにまで届いた声。アドニスは驚き、振り向くだけだったが——隣のミリイは顔を青くして、小さく呟いていた。

ありえない、と。